

『キリスト教神学』 補講  
教会論：礼拝論：  
11. ペンテコステ派の礼拝

一宮基督教研究所

安黒務

J.F.ホワイト著

『プロテスタント教会の礼拝ーその伝統と展開』

1. プロテスタント礼拝の研究
2. 中世後期の礼拝とローマ・カトリックの礼拝
3. ルター派の礼拝
4. 改革派の礼拝
5. 再洗礼派の礼拝
6. アングリカンの礼拝
7. 分離派とピューリタンの礼拝
8. クェーカーの礼拝
9. メソヂストの礼拝
10. フロンティア派の礼拝
11. ペンテコステ派の礼拝
12. プロテスタント礼拝の将来

# 11.ペンテコステ派の礼拝

1.序

2.ペンテコステ派の伝統の源泉

3.ペンテコステ派の礼拝の特徴

4.最近の展開

# 11-1.序

1. 聖霊への信頼に基づいた礼拝－非構造的アプローチ：Not only 礼拝の内容 but also 礼拝の流れ－紆余曲折を経ての進行
2. 聖霊は望むところに吹き寄せ－聖霊が選んだ人々を用いる－拘束的要素が少ない
3. 聖書ではなく、聖霊の直接的な働きかけ－not 聖書の中の聖霊but 会衆の中に現臨する聖霊
4. グロツラリア(異言)－癒し－聖霊のバプテスマに関する聖書箇所に対する省察
5. ペンテコステ派の伝統－世界的規模における多様性－独自性と同一性を形作る共通した特徴
6. プロテスタント教会の礼拝伝統における位置づけ－キューカーよりもやや右
7. 外面的なサクラメントを認める－音楽を多様する－按手を受けた聖職者の存在を認める－聖書朗読と説教の実践
8. 中世後期の礼拝の諸要素を維持

# 礼拝環境－会衆－礼拝行為

礼拝環境	会衆	礼拝行為
信仰行為	会衆	祈り
時間		説教
場所		音楽

# 礼拝伝統の位置づけ

	左(革新)	中間	右(伝統)		
16世紀	再洗礼派	改革派	アングリカン	ルター派	カトリック
17世紀	クェーカー	ピューリタン			
18世紀		メソジスト			
19世紀	フロンティア派				
20世紀	ペンテコステ派				

# 11-2a. ペンテコステ派の伝統の源泉

1. 1901年1月1日ーカンザス州トペカのベテル・バイブル・カレッジ学生アグネス・N・オズマン
2. チャールズ・フォックス・パーハムー「聖霊のバプテスマ」に関する聖書の証言探求の課題ー聖霊のバプテスマは常に異言のしるしを伴うーオズマン「一月の最初の日、十一時になろうというとき、わたしは異言で、神の栄光をたたえ、神を賛美するために、語り始めた！」ー彼女の体験はまもなく他の学生たちも共有するものとなった
3. カンザスにおける活動の衰え→「癒し」に重点を置いた「フル・ゴスペル」とか「ペンテコステ派」と称するメッセージへ

# 11-2b. ペンテコステ派の伝統の源泉

1. ヒューストンのバイブル・スクールーウィリアム・J・シーモアーロサンゼルス  
のナザレン教会の副牧師ー主任牧師と衝突  
参考文献：J.L.シェリル著『異言を語る人々』
2. 1906年ーアズサ・ストリートにあった教会で爆発的なペンコステ派の運動開始ー「使徒的信仰の福音宣教」「地上に降った炎」ー国際的運動の中心に  
参考文献：H.Cox"Fire from Heaven"
3. クロフォード(ポートランド)年、ダーラム(シカゴ)、キャッシュウエル→トムリンソン(南東部)、メイソン(メンフィス)、バラット(ノルウェー)、ボディ(英国)ーアズサ・ストリートの炎は世界中に  
参考文献：A.Anderson"Introduction to Pentecostalism"
4. 短期間に多くのペンテコステ派の教会の誕生ー多くの共通する特徴
5. アッセンブリーズ・オブ・ゴッドー1914設立、ミズーリ州スプリングフィールドに本部
6. チャーチ・オブ・ゴッド・イン・クライストー浸礼、洗足式、主の晩餐
7. チャーチ・オブ・ゴッドーテネシー州クリーブランドーバプテスマ、主の晩餐、異言を語る、癒し
8. フォースクエア・ゴスペル・国際教会ーマクファーレンー救い、聖霊のバプテスマ、癒し、再臨

## 11-2c.ペンテコステ派の伝統の源泉

1. ペンテコステ派—第三世界のほとんどにまたたくまに広がり、それぞれの地域に土着する形で発展
2. チリ(1907年、フーヴァー)、ブラジル(1910年)、アフリカ—さまざまな宗教伝統と使徒的伝統に立つキリスト教の伝統の結びつき
3. 1960年代—アメリカの主流派の中に—アングリカンの司祭デニス・ベネット、メソジスト、ルター派、長老派に属する諸教会でも同様の賜物についての証言、さらにカトリックの学生や諸教会においても一般的なものに  
参考文献：D.ベネット著『朝の九時』 『聖霊とあなた』
4. 当初、多くの教会ではそれに対して敵対的で防御的な姿勢—やがてほとんどの教会は自分たちの只中に存在するようになったネオ・ペンテコステ派の人々を受け入れ、歓迎するようになる

# 11-3a.ペンテコステ派の礼拝の特徴

- 1.ペンテコステ派の礼拝の多様性—一般化して表現することは困難
- 2.そこに多くの共通点—同時に、教会ごとの独自の特徴も顕著
- 3.洗礼に関して—ほとんどの場合、「信仰」を前提して「浸礼形式」を採用、しかしいくつかの教会では「幼児洗礼」を行い「水を灌ぐ形式」採用
- 4.1960年以前—権利を奪われていた人々、最も低い層の人々、抑圧された貧しい人々、社会から疎外された人々→悲惨な現実からの逃げ場を期待
- 5.現代—ゆっくりと社会的立場を向上させ—実業家たちの朝食会(FGBF)—より高い教育を受けた会衆—正規の神学教育を受けた牧師—下層の人々との接触・温かく迎え入れる場を保持

# 11-3b. ペンテコステ派の礼拝の特徴

1. 「聖霊が人を分け隔てしない」—社会的な階層による区別を超越する力—聖霊の賜物は「性別・人種」にまったく関わりなく与えられるもの→礼拝に集う全会衆の間に徹底した平等を生み出す
2. 按手礼を受けた聖職者には「新しい役割」—按手受領候補となる前に、その人物が異言のしるしを与えられていることが「按手の必須条件」
3. 牧師—礼拝中に示される「聖霊の導き」に従う心からの思い、一定の礼拝パターンの発達、「礼拝の流れ」は予測可能—しかし礼拝のなりゆきを決めるのは聖霊であり、司式者ではなかった—司式者は「礼拝の進み方を整える」ことにあった
4. 配慮に満ちたリーダーシップ、礼拝の流れに沿って働く意思—そして、礼拝におけるさまざまな出来事のつながりを「読み取る感性」が求められた
5. 女性もまたその最初から貢献—エイミー・サンプル・マクファーレン (FGBF) —主要な貢献

# 11-3c.ペンテコステ派の礼拝の特徴

1. ネオ・ペンテコステ派はさらに一層の多様性
2. キリアン・マクドネル著『カリスマ的刷新と教会』—ネオ・ペンテコステ派がいかに完璧に人々の必要に答えるものであるか—社会学・心理学・教育学・経済学の用語を用いて徹底的なかたちで論じている→この運動は、社会学的な意味での逸脱・心理学な意味での常軌を逸した現象とは異なり—ペンテコステ派以外のキリスト教の諸伝統と同じように正常な営み

参考文献：K.Mcdonnell“Presence, Power, Praise”

3. ネオ・ペンテコステ派の主要な特徴—「きわだった特徴が存在しない」点にある
4. ほとんどの教会員—中産階級に属し、大学教育を受けている

# 11-3d. ペンテコステ派の礼拝の特徴

1. 古典的ペンテコステ派に共通する幾つかの特徴
2. 千年王国の希望・終末論的希望—聖霊の臨在を示すさまざまなしるし—時代の終わりが近づいたことを示すもの
3. 聖書解釈において「根本主義者」—聖書は生活と礼拝の場においてきわめて重要な役割
4. 「使徒的言行録の証しするタイプのキリスト教」—使徒的、聖霊の現臨、異言を語る、癒しのわざ
5. サクラメントに対する「ポスト啓蒙主義」—神が礼拝に直接介入するという考え方—ペンテコステ派の礼拝における基本的な前提
6. もし異言によって聖霊の現臨が確認できる→洗礼は必ずしも無比の恵みの体験ではないことになる
7. 聖霊が個々人に対する癒しという目に見える形で働く→聖餐は必ずしもそれ以上の豊かな聖霊の現臨をもたらすわけではないことになる
8. 換言すれば、ペンテコステ派の礼拝全体は、そこに集う共同体の中で視覚的にも聴覚的にも、聖霊の行為と臨在を明らかにするという点で“サクラメンタル”なのである。

# 11-3e.ペンテコステ派の礼拝の特徴

1. ペンテコステ派の信仰行為－Iコリント12:12-13「強い共同体感覚」
2. 神の賜物－個人に付与、しかし全体の益のため－補完的役割－キリストの体を建てあげるために共に働く
3. 隣人を通して聖霊が臨在する－ゆえに喜び叫ぶ－聖霊がどこにでも降臨する可能性－聖霊に対する高い期待
4. ペンテコステ派における空間の感覚－「アズサ・ストリートの場所保存」に無関心に示唆
5. 「店頭を集会所とする教会」－すぐに道に面していた－公共の建物に入っていく感覚で教会へ
6. 整然とした教会の建物では不可能であった「宣教と受容」のメッセージを生み出した
7. 教会の建物を安く借りれる－予算なし、定まった収入なし、ただ主に対する信頼による「信仰を基盤」として運営

## 11-3f. ペンテコステ派の礼拝の特徴

1. 一週間の時間配分—中心となる主日朝の礼拝、夕拝、週の半ばの祈りの礼拝—礼拝後の「ゆったりした時間」—夕方の礼拝はリラックスした雰囲気
2. 聖餐を頻繁に実践する必要を感じていない—聖餐の頻度は、年に一回、毎月一回、毎週と非常に多様
3. グループによっては、聖餐と洗足が結び付けられている
4. 伝統的な教会歴については—クリスマスとイースター以外はほとんど重んじられていない—むしろ外部から招いた説教者と共に守る毎年恒例のリヴァイバルの集いが重視される
5. 野外キャンプ場でのキャンプ・ミーティング等—定期的な集会を守っている

# 11-3g. ペンテコステ派の礼拝の特徴

1. 最も重要な出来事—「聖霊を受ける」こと—それは、種々の賜物を受けることによって—たいていの場合は異言を語ることによって明らかにされる
2. 救いのプロセスを二段階と考えるか、三段階と考えるかで二つに分けられる—第一段階として「回心・義認・水のバプテスマ」、第二段階として「聖化」、第三段階として「聖霊のバプテスマ」
3. たいていは「信仰」を前提とする「浸礼」による洗礼—幼児洗礼をする教会は「散水の形式」
4. バプテスマに関する大きな議論—「イエスの御名のみ」か「三位一体の神の名」か—初期の分裂
5. グループによっては—「三位一体はイエスという唯一の位格によって構成される」とう主張に至った例もある—“ワンネス”運動は「イエスの名」のみによる洗礼—ユナイト・ペンテコスタル・チャーチ・インターナショナル

# 11-3h. ペンテコステ派の礼拝の特徴

1. 聖霊のバプテスマーより重要なものとみなされている
2. 癒しー癒しを求める人は、牧師と癒しの賜物を与えられた人々がその人の上に手を置き祈りに加わったー癒しの習慣が期待された効果を生んだことを示す証拠多数
3. 祈りー「成文祈祷」ではなく、口頭の「自由祈祷」、祈ってほしい事柄の提示ー全員が声に出して祈る「民主制」
4. 聖霊に満たされた礼拝ーその本質において「豊かな祈り」が満ち溢れているー異言でも祈り、日常の言語でも祈る
5. 祈りにおける異言の性格ー「芸術における抽象画」のようなものー抽象的な語りかけの形式としての異言ー人間の深い衝動を満足させる仕方で、言葉に言い表せないような内容を表現する手段
6. 一斉に声を出して祈るやり方ー音楽的な雰囲気すら伴うー声の調子が高くなったり、低くなったりー「イエスさま」「主をたたえよ」「ハレルヤ」「あなたを愛します」等々ー祈りの言葉と他の会衆の言葉が混じり合いーその場にいる人々のほとんどが熱意をもって礼拝に参加を促しー彼らの自意識を解き放つことになるーきわだった美しさを感じさせるもの

# 11-3i. ペンテコステ派の礼拝の特徴

1. 説教の特徴—多くの形式—綿密な釈義的説教から感情的で繰り返しを含む説教までさまざま—説教者と会衆の対話的關係—会衆からの頻繁な応答—叫び声、拍手、歌、異言等々
2. 音楽の特徴—多様性に富んでいる—ほとんどの教会で自らの教派や他の教派で作られた讚美歌が会衆によって歌われている
3. だいぶぶんの歌—メソジスト派やフロンティア派の教会のように、内省的な歌で占められている
4. ネオ・ペンテコステ派は讚美歌のレパートリーを拡大してきた
5. 常に、聖霊が思いのままに働きかけて実現する予期しえない可能性に開かれている—礼拝における「自発性」—ペンテコステ派が成し遂げた偉大な証し—こうした要素が他の諸伝統に広まりつつある

# 11-4a. 最近の展開

1. 礼拝伝統—決して固定的なものではない
2. 特に、聖霊の支配のもとにある時、礼拝が固定化することはない
3. 最近の数十年間において—他の伝統にたつ諸教会—ペンテコステ派の礼拝に突如として関心を示し始めた—また、ペンテコステ派の伝統そのものにも幾つかの大きな変化
4. これらの変化の一般的方向を示唆するもの
5. ペンテコステ派の諸教会—孤立する傾向を脱して—ペンテコステ派の教会相互の接触や他の伝統に立つ教会との接触を盛んにする方向に転じた→より幅広いエキュメニカルな関わりが確立
6. 変化のプロセス—ペンテコステ派と他の伝統との同化現象—特に目立ったのは「音楽の分野」において
7. カトリックにおける典礼の刷新→ルター一派からメソジストに至るまで重大な影響
8. ペンテコステ派にとって—印刷された文書・一定の形式はなじみのないもの—聖霊によって直接近づくことのできる他の手段がより重視

## 11-4b.最近の展開

1. ペンテコステ派の礼拝—驚くべき広がりを見せた第三世界—チリとブラジル—礼拝と正義の間により密接な関係—正義のための闘争と同一視—礼拝はその闘いを力づけるためのひとつの形—十全かつ平等な礼拝参与の可能性は人間の尊厳を肯定するもの—識字率の向上、貧困の克服、不正な政府に対する抵抗において非常に大きな貢献
2. アフリカ—いたるところに独立教会—そのほとんどはペンテコステ派—標準的な所得の低さ、しかし多大なささげものにより膨大な数の宣教師—土着の文化取り入れ、現地出身の指導者が多くの人々の支持、礼拝に独自の個性的特色の盛り込み—癒しの働きは枢要な位置
3. 礼拝における「土着化」については十分な努力—他方、どの程度まで「文化受容」がゆるされるべきなのか—疑問を呈する人々もある

## 11-4c. 最近の展開

1. 米国とヨーロッパにおけるペンテコステ派の社会的上昇—必然的に礼拝における変化もたらした—牧師に求められる教育水準の変化
2. 1949年—アッセンブリー「大学の学位は按手のための必須条件ではない」と宣言していた→社会の教育水準の上昇—現在では「神学校の学びの後」に按手
3. 専門の建築家のデザインによる教会堂の建築—ガウンを着た聖歌隊や巨大なパイプオルガン
4. ペンテコステ派の「教派としての組織化」に対する積極的な抵抗→1947年「後の雨」運動・レストレーション運動—復興・回帰—戻るべき原点とは、新約聖書時代ではなく、半世紀前の20世紀初頭のペンテコステ派の英雄的な日々
5. 本来のペンテコステ派の感動が失われてしまったと感じられた時→他の諸々のグループが出現し続けた。

# 11-4d. 最近の展開

1. 「聖霊の賜物が彼らの間で乾ききってしまったのではないだろうか」という恐れ—集会における感情的な高揚が薄らぐにつれて—異言を語ることが少なくなっていくのではないかと心配されている
2. ネオ・ペンテコステ派の台頭—不安を解消するもの—アングリカン、メソジスト、ルター派、長老派、カトリックのネオ・ペンテコステ派の集会—ペンテコステ派の礼拝を彼らの自然な形として採用
3. ペンテコステ派は主流派教会に対して影響—最も主要なもの—礼拝における“自発性”の価値を新たに認識させてくれた—礼拝の中で生じる予期せぬ可能性への開かれた態度—礼拝における突発事の中に秘められた価値
4. ペンテコステ派以外の諸教会においても—身体と心の癒しに対する責任が考慮—異言を語ることさえ、恐れを感じさせる体験ではなくなってきた—かつては神秘的現象を嫌悪していた多くの教会—黙認また歓迎されるように